

第2節 第二次世界大戦まで

～ 1945 (S . 20) 年

(1) 江戸時代

江戸時代、墨田区にあたる地域は、大都市江戸の外周部であった。そして、調査対象地である鐘ヶ淵周辺地区は、荒川と隅田川に挟まれた低湿地の水田地帯であった。当時は隅田村と呼ばれており、この地域では最古の村落であった。当時の産業というと、瓦焼き、染色、皮革などの地場産業がある。これらの地場産業と農業は隅田川などの豊かな水源を利用して行われていた。隅田川は、豊かな水源と、便利な水運をもたらした。しかし、時には洪水をもたらし、周辺を水浸しにすることもあった。そこで、治水を完全にすることが重要となった。

また、当時の商業はどうだったのでしょうか。1851 (嘉永4) 年において、問屋は本所に911軒あった。しかし、向島には「炭薪仲買業」がわずか9軒あったのみであった。当地区を含む、区北部の商業は発達が遅かったのである。【注1】

(2) 明治時代

明治期に入った頃、大規模工場が当地区に進出した。そしてその大規模工場に関連のある人の町として、工業、商業が共に発展する地域となった。

1870 (M . 3) 年頃の隅田村は、戸数179戸、人口1000人程度の農村であった。隅田川以西は都市であり、以東は農村という構図が、明治の中期まで続いていたのである。しかし、都市化・資本主義化の流れは、近郊の農村に、変容を迫るようになった。

1889 (M . 22) 年、現在の墨田5丁目に鐘淵紡績(現在の鐘紡) が操業を開始した。当初の従業員数は351人であったのが、大正の末期には、5000人程まで増えた。また、鐘紡に続くかのように、大規模な工場がいくつか集まり始めた。大規模工場は、隅田川の河畔に開設されていく。そして欧米からの移植産業、中でも靴、石鹼、カバン、セルロイド、メリヤスなど、中小企業の分野を幅広く受け入れ始めた。例えば、1896 (M . 29) 年隅田町に機械の天野工場、1900 (M . 33) 年隅田村に石川ゴム製造業、1912 (M . 45) 年寺島町に石けんの若山太陽舎が設立された。【注2】

この地区に工場の立地が行われた理由は主に3つ考えられる。1つは、東京外周部として水田が広がり、地価が安く、水運に恵まれていたこと。2つ目は皮革、染色などの先行

産業があったこと。これらの産業は労働集約的であり、墨東地域の旧武士層、またその他の単純労働者を救済するという意味で、低資金の労働力確保にもつながっていたと思われる。そして3つ目は、東京の物品集散地である日本橋から浅草の後背地であったということ。これにより、日用消費財の最大の供給地としての性格付けが行われた。【注3】

(3) 鐘紡

これらの理由により、当地区には大中小様々な規模の工場が集積していった。この傾向は大正時代に入ってから変わらず、当地区は水田の村から、関連工場とそこで働く人々の町へと変わっていくのである。

とりわけ、鐘紡の影響は大きかった。現在の墨田3、4丁目には、「鐘紡住宅」と呼ばれる鐘紡の社宅があった。多くの女工も暮らしていて、付近の酒屋、八百屋などと結婚した人も多数いたという。鐘紡を中心に一種独特の一族意識があり、社宅の電気・ガス・水道は鐘紡が供給した。商店の顧客も鐘紡の従業員など工場労働者が中心で、さながら「鐘紡城下町」の様相を呈していた。

墨田区役所『墨田区史 前史』第6章 p. 680

(4) 荒川放水路

1910(M.43)年に暴風雨による大洪水が起こった。その後も3度にわたり暴風雨による大規模な洪水が発生した。長年水害に悩まされてきたため、対策として、荒川放水路の建設が始められた。この工事は1911(M.44)年に用地の買収が始まり、1913(T.2)年に本格的な工事が開始された。隅田村の一部は川の底へ沈んだ。しかし、この治水工事により、大規模な洪水の心配がなくなった。そのため、隅田村は、人々が安心して暮らせるようになった。大工場の進出と荒川放水路建設により当地区の人口は徐々に

増加し、当地区は宅地化が進展していくことになる。

隅田村の人口は、1920（T.9）年で、1万4600人、1925（T.14）年で2万1300人、1934（S.9）年で、2万5000人という、増加ぶりであった。しかし、当時の隅田村は東京市に含まれていなかった。このため、村が自治体として、区画整理を行ったものの、予算の不足などにより十分な成果をあげられなかった。区画整理が不十分なところに人口が急増した。これが現在まで続く入り組んだ町並みの原因の一つとなった。

（５）関東大震災

現在の墨田区は、当時は本所区と向島区の２つから成り立っていた。本所区と向島区には、地価の安さと都会への近さのため乱雑に住居や工場が集積していた。しかし、1923（T.12）年の関東大震災で、南部の本所区は焼け野原になるほどの大打撃を受けた（＜図表2-2-1＞と＜図表2-2-2＞を参考）。そのため本所区では復興区画整理が進んだ。しかし、北部の向島地区ではそれほど大きな被害がなかった。人口が集中し、さらなる宅地化が進行した。その上、従来の田畑や、畔道も残った。残ってしまった曲がりくねった畔道は、当地区に後々影響を与えていくことになる。

商業に関しては、「東向島駅（当時の玉の井駅）東側のマーケット（今の水戸街道の寺島広小路から東に500m程の夜店街）が栄えており、例えば焼き鳥屋や、バナナのたたき売りなど、赤線にやってくる客で賑わっていた」といわれている。【注4】また、赤線で働く女性も、お客として物を買うこともあったらしい。しかし、「商売は赤線に關係のある人を特別対象にしたものではなかったため、赤線が栄えているから部品商も栄えるということとはなかった（自転車専門店・有我さん）」という話もある。

現在も操業を続けている工場の中に、大正から昭和期にかけて操業を始めたという工場もいくつか見られる。「もともと祖父がここで鍛冶屋をやっていて、現在の作業場も大正時代に建てられたものを使っている（ボルト製造・小山さん）」というように、元々の住民が創業した例。「昭和6、7年に独立、工場を設立した（工業用ゴム製造・杉本さん）」というように地域内の工場から独立した例。「先代は本所の工場に勤めたが、たまたま土地が見つかったので震災の前に旧寺島町（現在の東向島）に移転して工場を始めた（金属プレス金型・松原さん）」というように、独立を契機に移ってきたという例などがあげられる。また、いずれの例も、工場の形態は住工併設型であった。

墨田区役所『墨田区史 前史』第8章 p . 1

0 2 2

< 図表 2 - 2 - 1 > 関東大震災による建物被害（罹災戸数）の内訳

墨田区役所『墨田区史 前史』第7章 p . 8 0 9

< 図表 2 - 2 - 2 >

関東大震災による本所区内の延焼状況

墨田区役所『墨田区史 前史』第7章 p. 800

(6) 戦時経済の深まり

そして1934(S.9)年の満州事変による軍需景気を境に、戦時経済の風潮が深まっていくな。当地区にも、重装備な機械金属工場が一部に成立しはじめる。1940(S.15)年には、寺島町に小穴製造所(現在日本電気精器)が操業開始。1943(S.18)年には、鐘紡が機銃弾などの兵器工場に転換していった。時代の流れによって、このような重厚長大型の工場も見られたが、必ずしも、この地域の工業の骨格とはならなかった。

中小工場の中にも「太平洋戦争前に、金型プレス工業を行った(杉本さん)」というように軍需産業への転換を余儀なくされたところもあったようである。

1945(S.20)年には空襲によってこの地区も3回にわたる被害を受ける。だが、全滅してしまった本所地区に比べ、奇跡的とも言える小さな被害に止まった。

<図表2-2-3> S.5年頃までの北部地域の字区画と字名

墨田区民が語る昭和史

<図表 2 - 2 - 4> S . 7 年 ~ 3 9 年の北部地区の町区画と町名

墨田区民が語る昭和史

【注 1】『墨田区商業実態調査報告書』 p . 3

【注 2】『墨田区機械金属工業の構造分析 - インナーシティにおける発展課題 - 』
p . 4 「（表 1 - 1）明治～大正期の有力工場」を参照

【注 3】『墨田区機械金属工業の構造分析 - インナーシティにおける発展課題 - 』
p . 2 ～ 1 2 を参照

【注 4】『墨田区民が語る昭和 life 史』を参照